

より敬意を失することあらば御寛容を御願ひいた します

## 英文學にあらはれたる子供 (七)

東京女子高等師範學校教授 岡 田 み つ

### 『トム』と『マギー』 (Tom & Maggie)

——「マギー」が髪を截る一段——

いよく伯父伯母達が御客に來た。而して、デイン「伯母さんは「ルーシー」といふ小女を連れて來た。今「トム」と「マギー」は父親と「グレンツグ」伯父さんとの後に付いて庭から入つて來た處だ。「マギー」は帽子を無造作に投り出して、折角縮らせてあつた髪の毛もばさ／＼になつて居る儘で、「デイン」伯母さんの膝に倚れてゐる。「ルーシー」の所へ駆け寄つて來た。此從姉妹同士は全然似て居なくて一寸見には「マギー」の方が見劣りがするが、眼の利く人が見たらば、今既に老成整つてゐる「ルーシー」よりも、「マギー」の方を、年頃になつ

て發達する見込があると云つて取りさうである。例へば白毛の子猫と、荒くれた大柄の子犬とを並べたやうで「ルーシー」の様子は如何にも清らかなである！圓／＼しい首に、珊瑚玉の飾りをして、小やかな素直な鼻付きで、はつきりした眉が髪の毛よりもや／＼色が濃いので、淡褐色の目の色によく映る。「ルーシー」は今丁度其目を上げて、嬉しさうに極り悪さうに「マギー」を見て居る所である。「マギー」よりも年は一つ位上なのだが、丈は首位も「マギー」よりは高いのである。「マギー」は「ルーシー」に逢ふのは大好きで、いつも心の中に

子供ばかりの世界を造り出して、「ルーシー」見たやうな女の子を、其處の女王に据えて、王冠を戴かせたり、手に笏を持たせるのだが、但し自分が「ルーシー」の姿をして女王になるのである。

マ「ルーシーさん」と「マギー」は勢込んで「兄さんと私の處へ泊つていらつしやいな。ネ？兄さん、」

「トム」も「ルーシー」の近くまで来てゐたのだ。實は伯父さん伯母さんに一々挨拶するよりも、「マギー」と一所に「ルーシー」の傍へ来た方が樂だからなので。其でゐて何を見るといふのでもなく、恥かしがりの男の子が御客の前でするやうに、顔を赤らめて、手持無沙汰に半ば笑顔を作つてポンヤリ立つて居た。

グ「オヤマー」と「グレッグ」伯母さんは聲に力を入れて、「子供達は此處へ入つて來ながら、伯父さんや伯母さんに知らん顔をしてゐるのかね。私

といふので、「マギー」の母親は心配さうに、

「さあ、伯母さん伯父さんの所へいつて御挨拶をおし」と云ひながら、實は「マギー」を小脇へ呼びで、髪を梳して御出でと傳へたかつたのである。

グ「今日は！御前方は大人しいだらうね」と「グレッグ」伯母さんはやつぱり大聲で重々しく言ひながら、子供達の手を固く、指輪が當つて痛い程に握る。

「顔を御上げ、」トムさん。寄宿學校へ入らうといふ子は、シャンとして居るものです。伯母さんの顔を御覽」

といつても、「トム」は厭がつて握られてゐる手を引き放さうとしてゐる。

「マギー」さんも髪を耳の後に御挟み。

而して着物をちやんとなさい」

「グレッグ」伯母さんは、子供達が鬢か馬鹿の積りでいつも此調子でやり出すのである。

「ブレット」伯母さんは氣の毒さうな調子で、

「オヤ、皆さん大きくなつた事」といつて、子供達を越してその母親を、陰気な顔して見ながら、「かう丈が伸びて、身體が弱くは無いのか知らん。「マギー」さんは毛が多過ぎる。もつと隙をこしらへて、而して短かくしてやつたらいいでせう。身體によくありますまいよ。其で色がかう黒いのかもしれない。如何でせう」と「デイーン」伯母さんの方を顧る。

「デイーン」伯母さんは「どうですかね」と云つて口を禁んで「マギー」を評價的に見てゐる。

父「なに」と父親は受けて「この子は丈夫ですよ。何處も悪くはないのです。麥だつて赤いのも白いのもある。もの人の好きくでさ。だが此の子の髪はもう少し短かくしてやつたら、あんなに散らなくてよからうに」と云ふ。

「マギー」の胸には大決心が湧きかゝつて來た。が、先「デイーン」伯母さんが「ルーシー」を置いて行くか如何か、氣遣しいので、其が定まつてからと思

つてゐる。「デイーン」伯母さんは滅多に「ルーシー」を遊びによこさぬので、今も種々の事を種に斷つて御出のだが、やつと「ルーシー」に向つて、  
デ「御母さんがぬないでは、泊つて行くのは厭でせう」と云つて。

ル「イーエ母さん。泊らせて頂戴」と「ルーシー」は顔から首まで眞赤にして恐るゝ云ふ。

デ「ア、偉いな！」と「デイーン」伯父さんは云つて「泊らせてやりなさい」と口を添へる。

「マギー」の母親は「ルーシー」一泊の事が定まると直ぐ、「マギー」を手招して耳元で、

母「マーさんや、髪を直して御出でよ。見つともないから。マーサ（女中）の處へいつてから、御座敷へ御出でと云つたのに。覺えてゐるでせう」

マ「兄さん一所に來て頂戴」と通りがけに、「マギー」は「トム」の袖を曳張つて囁くので「トム」は好い機だといそぐついで出て來る。戸の外へ出

ると直ぐ、「マギー」は小聲で、

マ「一所に二階へ来て頂戴。御飯前に爲たい事があるから。」

ト「御飯前に遊ぶ暇なんかないよ」と云ふ「トム」は御飯が待ち遠いので。

マ「あつてよ。いらつしやい」と「マギー」がいふ。で、「トム」は母親の寢室へと「マギー」に付いて行くくと、「マギー」は引出しからさつさと鋏を一挺持ち出して来る。

ト「何にするの。マアさん」と「トム」は好奇心をそゝられて尋ねる。

「マギー」は前髪を掴んで、額の中程から横にザクリと袂を入れた。

ト「オヤ！叱られるよ。もう切るの御止め」と「トム」は絶叫する。「トム」がそういふ間に、ザクリと又鋏は音を立てた。「トム」もさすがに面白くない事もないので、「マギー」が妙な恰好になるだらうなど、思つてゐる。

「マギー」は自分の大膽な所行で氣が跳んで、最後まで仕終へて仕舞いたいと思ふので、

マ「さあ兄さん！後部を切つて頂戴」と云ふ。

ト「だつて、叱られるよ」と「トム」は忠告顔に首を點頭かせて、鋏を手にながらも躊躇してゐる、

マ「構はないわ。早くさ。」と「マギー」は足をトン／＼させて、頬を眞紅にしてゐる。

「マギー」の黒い髪は房々としてゐるのだから、馬の鬃を切つた覚えのある「トム」にとつて之程誘惑的のものはない。鋏の齒が手頃の堅さの毛髪を鋏む刹那の愉快は、知る人ぞ知るで、ザクリ、又ザクリと音に連れて「マギー」の後から毛がドサリ／＼と落ちた。切り跡はぎざ／＼の不揃ひであるが「マギー」は森の中から明地へ出た氣持でせいせいと伸び／＼した感じがした。「トム」は跳び廻つて小膝を打つて、笑いながら、

ト「マアさん、ヤ／＼／＼／＼！變だよ！鏡

で御覽！學校にゐる馬鹿のやうだ。僕達が胡桃

を打付けてやるあの馬鹿見たやうだ」

と云はれて「マギー」は思はず胸を痛めた。唯毛の頬さいのどと、髪がくくと云はれるのが頬さいのど、切つてさへしまへば助かると考へたのと思ひきつた所置をして母親をも伯母さん達をも驚かせてやらうとやゝ得意の念のあつたので實は截つたのである。「マギー」は美しい髪で居たいなどの望は少しもないので、自分を怜悧だと賞めて、何も小言を言はずにおいて欲しい其ばかりが願ひであつた。其が今兄に笑はれ、馬鹿見たやうだなどと言はれて、始めてはてなと思つて鏡で自分をじつと見た。見てゐるうちも「トム」は、やつぱり笑つて、手を叩いてゐたが、「マギー」は「紅のさしてゐた頬が白くなつて、唇さへ震へて來た。

ト「マギーさん。もうぢき御飯に下りて行かなくてはならないよ、ヤレ〜〜！」

マ「笑つてはいや！兄さん！」と「マギー」は口惜し涙に噎びながら「トム」を突き飛ばして絶叫す

る。

ト「そら始まつた、怒りつぽ！そんなら何だつて切つたのさ。僕は下へ行かう。御馳走の匂がするから」

といつて「トム」は階段を走り下りて行つてしまつた。して「マギー」は、取り返しのかぬ目に逢つた心地で取り残されてゐる。良く考へて見れば詰らぬ事をしたもので、尙以後煩さく此事をいはれるに極つてゐる。「マギー」は一時の熱情に驅られて事を遂行しておいて、後になつて、其結果ばかりか、若し其事をせずにおいたら、かうもあつたらうにとあらゆる方面を強い想像力で、細かく又誇大して認識するのである。「トム」は「マギー」のやうな馬鹿な真似はしない。といふのは、自分に及ぼす利害を辨別する力が、自然的に餘程あるので、實際「マギー」よりも強情で固意地なのだが、母親は「トム」を悪い子だといつた事は滅多にない。假に「トム」が失錯をする事があるとすれば、「ト

ム」は其を是として心に掛けぬのでたとへば父親の鞭で門を叩いて索が切れると、どうも止むを得ぬ事だ。鞭が蝶番に引掛るのがわるいのだ。一體門を叩くなんて感心すべき行でもあるまいが、自分即「トム」といふ子が此門を打つても少しも悪くはないので、自分は決して悔いたりしないとかういふのである。

「マギー」は鏡の前で、泣きながら考へるに、御飯にいつて伯母さん達に恐い目で見られるのほども堪まらぬし、「トム」や「ルーシー」や、御給仕をしてゐるマーサや、父さんや、伯父さんが嘸笑ふだらうし。トムが笑つた位だから誰だつて笑ふだらう。……あゝ髪を其儘にしてさへおいたら、今頃は「トム」や「ルーシー」と一所に坐つて御馳走をたべてゐられるのに！ 嗚呼泣くより他に仕方がない。

「マギーさん、直ぐ下りていらつしやいませ」とケジャ（女中）は急ぎ足で部屋へ入つて来て「ま

あ！ 何をなすつたの！ こんな御化けのやうな方を見た事が御坐いません」といふ。

年「いゝよ、ケジャ―彼方へ御出で」と「マギー」は忿然としていふ。

ケ「でも直ぐいらつしやいと御母さんが仰いまして」と「マギー」に近寄つて床から引起さうと手をとる。

マ「あつちへ行け！ 御飯なんか欲しくはない」と「ケジャ」の手に抵抗しながら「下へ行かないよ」といふ。

ケ「では私は此處には居りませぬ。下で御給仕をいたしますから」と「ケジャ」は出ていつて仕舞つた。

十分程してから「トム」は部屋を瞰きに來て、

ト「マーさん、いやな人！ 何故、御飯食べに來ないの。美味しいものが澤山あるよ。而して母さんが御出でつて。何泣いているのさ。意久地なしさん！」

「マギー」は思ふに……まあ非道い！「トム」は冷淡で無頓着だ！若し兄さんが床に坐り込んで、泣いていも居れば、自分も一所に泣くのに！美味い御馳走もあるのに、自分は斯のやうに御腹が減つて！あゝ辛い！

併し「トム」は無情なでもない。泣きたい氣持もしないし、「マギー」が悲歎に暮れてゐるからとて、御馳走が樂みでない事もないからなのである。併し今「トム」は「マギー」に頭を摩り寄せて賺すやうに、

ト「ね、マリーちゃん御出な！其とも僕のブッデングを少し持つて來て上げやうか、カスタードダの何かを」。

マ「エ……」と「マギー」は答へて、少しは此世に望みがあるやうな氣持がした。

ト「其なら御待ちね」と「トム」は立ち去ろうとして、戸口で振り返つた、「だが來た方がいゝよ。食後の御菓子、それ胡桃もあるしカウスリツプ酒も

ね」

「マギー」は涙が止まつて仕舞つて、此度は考へ初めた。兄さんが機嫌よくしてくれたので、苦痛の烈しい部分が癒えたから、胡桃やカウスリツプ酒がそろ／＼勢力を得て來た。

落ち散らばつてゐる髪の中から、やをら立ち上つて、「マギー」は階段を下りた。而して食堂の戸に片方の肩を寄せかけて、開いてゐる處から中を瞰いた。「トム」と「ルーシー」は明き椅子を一つ後ろにして坐つて居て脇のテーブルにはカスタードが載つて居るので「マギー」はもう我慢がしきれなくなつた。而してそろりと入つて明き椅子の方へ歩んだ。しかし其處へ腕を下した途端に、あゝ來なければよかつた。二階に居た方がよかつたと思つた。

母親は「マギー」を見て、アツといつて、其拍子に大きな汁匙しるさじを鉢の中へ落して、卓子掛をだいなしに仕てしまつた。「ケジャ」は妻君が肉を切り分け

てゐる時に、驚かせるでもないと思つて、「マギー」が御飯に來ない譯を話さなかつたので、「マギー」の母は、只マギーの強情が始まつて、自分で御飯を食べぬといふ罰を受けてゐる事位に思つてゐた。

妻君の大聲に、人々の視線が皆同じ方へ向いた。

「マギー」は頬も耳も燃えるやうに覺えた。「グレッグ」伯父さんはやさしい白髮の老人だが、

ケ「やれまあ!とこの子だね!私の知らぬ子だ。

そこらの途で捨て來た子かへ「ケジャ」といふ。

父「ハア!自分で毛を截つてしまつたのだな。こんな御轉婆てんばの女の子が他處よそにあらうかな」と父親は小聲で「デイン」伯父さんに話して、しきりに可笑しがつてゐる。

プ「まあさん妙は恰好になつたよ」と「プレット」

父さんは云つたが、此人は之程慘酷に聞こえる批評をした事は定めしないのだから。

グ「エーイー!馬鹿な!」と「グレッグ」伯母さんば

一番大聲に一番口噴くぶましく叱責して「自分で髪の毛を切るやうな子は、打懲らしてバンと水だけ食べさせて置くがいい。伯父さん伯母さんのゐる處へ出て來させないで」

グ「さうく」と「グレッグ」伯父さんは妻の恐ろしい宣言を滑稽化するつもりで、「牢へでも入れるといふ。すると毛を皆切つてギザくでなくして呉れる」

プ「餘計ジブシーに似て來た」と「プレット」伯母さんは、哀れむやうに云ふ。「どうも相憎あひにくのものです。ここでは女の子が色黒で、男の子が色白なのだもの。あのやうに色黒ではこの先が案じられる」。

母「眞實ほんとに惡戯いたづらツ子で親に氣を揉ませます」と母親は目に涙を浮かべてゐる。

「マギー」は小言と冷笑との合唱を聞いてゐるやうな氣持で、始めは顔が眞赤になつて、腹立たしさの餘りに拮抗しやうかとの氣も起つた。「トム」も「マギー」が御菓子に心を引かれて、此場を堪たへ



通すものと思つて、小聲で。

ト「ね、マギさん、叱られるよつて僕言つたらう」

と親しみの積りでいつたのだが、「マギー」は「トム」が自分の不面目を氣味よがつてゐると思つたので、皆に反抗しやうとの勇氣も失せ。胸が一杯になつた。急いで椅子を離れて、父の許へ走り寄つて、その肩に顔を隠してワツと泣き出した。

父「よし／＼心配しなくともいゝ、」と父は、腕で抱へるやうにして「煩さかつたから截つたので構はないとも泣くのは御よし。父さんが味方になつてやる」

何といふ仁慈なまきの言葉だらう！「マギー」は父さんが味方をして下すつた其折々の事は、決して忘れなかつた。後年になつて、世間ではこの父は、子供の爲を計らはなかつたと批評をすると、マギーは必らず之を思ひ出した。

「父親があゝ子供を我儘にしては」と「グレッグ」

伯母さんは内所で妻君に云ふ「氣を付けぬとあの子の身の破滅になりますよ。私の父は決してあんな育て方はしなかつた。あんなだつたら、今日私達はかうしてゐられますまいに。」

妻君は、苦勞が絶頂に達して、無感覺の域に達したらしく、「グレッグ」伯母さんの言葉も耳に止めず、覺悟をきめたといふ風で、黙つてプツデングを盛り分けてゐた。

食後の御菓子的一段になつて、マギーはやつと樂になつた。御天氣がよいから、子供過は四阿あつやへいつて御菓子を御上りといはれて、「マギー」も皆と打連れて庭の繁みへと走り去るのであつた。

○本會夏期講習會につき

本會夏期講習會につき諸方よりお問ひ合はせを受けますが、本年は開催いたしませんから左様御承知を願ひます。